

2017年度一橋大学審査学位論文

犠牲者ディアスポラと労働ディアスポラの間で

—— 横浜市鶴見区で邂逅するウチナーンチュたち ——

論文要約

SD141020 藤浪海

1. 目次

序章 ディアスポラの視座から読み解く沖縄系－南米系移民

1. 問題意識——グローバル化のなかで邂逅を果たすディアスポラの人々
2. 先行研究
3. 研究課題
4. 分析枠組み——移住システム論とエスニック・ネットワーク論
5. 調査方法
6. 本研究の構成

第1章 「帝国・冷戦の時代」における沖縄からの出移民

——植民地主義のもとでの「犠牲者ディアスポラ」

1. はじめに
2. 「帝国の時代」：日本への強制的な編入と政策的に作り出される貧困
3. 「冷戦の時代」：沖縄戦により荒廃する土地と押し付けられる米軍基地、そして本土復帰運動
4. 小括

第2章 「帝国・冷戦の時代」における沖縄から鶴見への移民

——底辺労働市場への編入と二重意識の形成

1. はじめに
2. 「帝国の時代」：本土移住の始まりと「人夫出し」の登場——「沖縄的労働市場」の形成
3. 「冷戦の時代」：本土県人会も巻き込んだ「本土送り出しシステム」の形成
4. 小括

第3章 「冷戦の時代」における沖縄から南米への移民

——「政治の道具」としての移住から、農業・自営業での発展へ

1. はじめに

2. コロニア・オキナワの沖縄系コミュニティ——農業コミュニティとしての発展と転住の進展
3. ビラ・カロンの沖縄系コミュニティ——自営業コミュニティとしての発展と転住者の受入
4. 小括

第4章 「グローバル化の時代」における南米から鶴見への移民

——「フレキシブルな建設労働者」としての「労働ディアスポラ」

1. はじめに
2. コロニア・オキナワから鶴見への移民
3. ビラ・カロンから鶴見への移民
4. 「フレキシブルな非熟練労働力」としての編入——「労働ディアスポラ」としての鶴見の南米系移民
5. 小括

第5章 経済・就労におけるエスニック・ネットワーク

——沖縄系日本人との分離からエスニックな労働市場の確立へ

1. はじめに
2. 沖縄系日本人電設業者からの独立と起業の進行
3. 「強い紐帯」のもとでの労働市場安定化に向けた取り組み——アソシエーションの結成
4. 南米系第二世代への継承へ
5. 小括

第6章 生活・教育におけるエスニック・ネットワーク

——「犠牲者ディアスポラ」としての歴史が生み出す「共振」と断絶

1. はじめに
2. 「犠牲者」性がうながす／阻む日本人とのネットワーク
3. 日本人の取り組みがうながす子どものエンパワメント——「沖縄ヘルーツを探る旅」
4. 小括

第7章 ブラジル系コミュニティと「男性稼ぎ主型」ジェンダー分業

——再生産労働を担う女性たち、ブラジルへの帰還を選択する男性たち

1. はじめに
2. 女性たちの抱える困難
3. ブラジルへ帰還する男性たち
4. 小括

終章 犠牲者ディアスポラと労働ディアスポラの間で

1. 本研究の結論
2. 今後の課題

付録

参考文献

あとがき・謝辞

2. 問題関心と研究目的・課題

(1) 問題関心

ディアスポラ——世界各地に離散しつつもホームランドに由来するアイデンティティを持ち続ける集団は、しばしばこのように呼びならわされる。沖縄もまた、まさにこのような状況にある集団のひとつである。琉球処分以来、日本の植民地主義的な政策のもとで沖縄は、貧困や激しい地上戦、米軍占領などさまざまな困難を抱えてきた。そしてそうしたなかでこそ、多くの人々が沖縄からハワイや南米、日本本土などへと離散していった。沖縄から海外への移住者数は、戦前は全国で 2 位、戦後は 1 位を誇り、現在も各地に沖縄系コミュニティが存する。まさにこれは「沖縄ディアスポラ」と呼びうる状況である。

しかし同時に、離散した人々のエスニック・アイデンティティは、必ずしも同質的なものではないことにも注意が必要である。ディアスポラであることは、離散した人々が一枚岩の存在であることを意味しない。むしろディアスポラには必ず、差異が内包されたこととなる。なぜならエスニシティとは、各移住先社会の文脈に規定されながらそれぞれ多様な形で編成されるものだからである（鄭 2017: 753）。たとえ同じホームランドに出自を持つといっても、そこに込められる意味合いは離散集団ごとに異なるものとなる。移住先社会で差別を受けるなかで克服すべき負のものとして否定的に捉えられるようになることもあれば、その不利な状況を集団的に克服するなかで逆に積極的に称揚すべきものとして肯定的に捉えられるようになる場合もある。

このように「沖縄ディアスポラ」と一言にいつても、そのあり方はけっして一枚岩ではありえない。本書が主なフィールドとする横浜市鶴見区が興味深い地となっているのは、「沖縄」という同じ出自をもちつつも、異なる離散の経路のなかで「沖縄」であることに別様の意味を付与してきた集団——沖縄系日本人と沖縄系—南米系移民——が居住しているところにある。日本の植民地主義の「犠牲」となるなかで沖縄から送り出された鶴見の沖縄系日本人は、離散後も日本—沖縄の非対称な権力関係に直面し続け、Cohen（2008=2012）のいうところの「犠牲者ディアスポラ」としての性格を色濃く残してきた。それに対して沖縄系—南米系移民はその離散の過程で「犠牲者」性を減じ、資本主義の論理のもと市場経済を支える労働者として、すなわち Cohen（2008=2012）のいうところの「労働ディアスポラ」と

して鶴見に移住した。沖縄という同じ起源をもちつつも異なる経路をたどってきた両集団は、なぜこの地に集住することとなったのか。そして「犠牲者ディアスポラ」沖縄系日本人と「労働ディアスポラ」沖縄系－南米系移民の間では、いかなる関係が構築されてきたのか。

これまでディアスポラ研究では離散した集団同士の越境的なつながりの形成の可能性が語られることが多かった（Clifford 1994=1998 など）。しかし異なる経路をたどってきた集団同士が容易につながりを形成しうるとは限らない。離散集団の間のつながりの形成はいかなる文脈のなかでうながされ、あるいは阻害されるのか。本研究はこのような問題関心を背景として、横浜市鶴見区の沖縄系の人々の事例から、歴史的な視野のもとにディアスポラの人々の越境的なネットワーク形成をめぐる可能性と限界を探るものである。

(2) 先行研究

1980 年代後半から、1990 年の出入国管理及び難民認定法改定による在留資格「定住者」の新設を経て、多くの日系南米人が来日するようになった。しかしかれらへの「定住者」資格の付与はあくまでも親族訪問という名目によるものであり、かれらを正面から日本で暮らし働く人々として正面から認め受け入れるものではなかった。それがゆえに、それはかれらをめぐる統合政策の欠如へと帰結していくこととなった。

日系南米人をめぐる先行研究において、日系人という法的資格と社会学的現実との乖離が強調され（梶田 2002）、かれらが「異質」な「外国人地域住民」「外国人労働者」「外国籍児童生徒」として措定されてきたこと、それによりかれらの直面する構造的・制度的な不利に焦点が当てられてきたことには、以上のような背景がある。しかしその一方で今度は、「日系」としての歴史的な側面、民族的アイデンティティは見落とされるようになったこともまた事実である。そのなかで鶴見の事例が興味深いのは現実に沖縄系の人々の集住が起こっていることであり、ここにディアスポラの視点から「沖縄系」であることに再度着目しその離散の歴史をたどりなおす必要が示されている点にある。

以上の問題点を踏まえたうえで本研究では、ディアスポラ研究の枠組みのもとで検討を進めた。ディアスポラ研究は、移民の受け入れ社会への同化／編入を強調し、受け入れ社会内部での社会的上昇移動の可能性に関心を寄せてきた移民研究に対するオルタナティブとして、1960 年代末から 1970 年代半ばにかけて活発化した研究領域であり、ヘゲモニー性や差別性、文化的同質化をうながす力を帯びた国民国家に対抗するというポストモダンのプロジェクトの一部として生起してきたものである（Vertovec 2009=2014）。国民国家に閉じない越境的なコミュニティのあり様や、受け入れ社会に同化されつくされないハイブリッドな意識や文化をとらえようとする点にその特徴がある。

ディアスポラという用語は徐々にその意味が拡張されていき、ユダヤ系やアフリカ系など抑圧を受け離散した集団にとどまらず、さまざまな要因によって世界に散った集団にあてはめられるようになり、さらに 1990 年代に入ると、従来地理的に静態的な存在としてみなされる傾向にあったディアスポラが、繰り返される人々の移動のなかで変容し（再）構築

され続ける動態的な存在としてとらえられるようになった（van Hear 1998 など）。

こうしたなかで同じ出自を有しつつも、それぞれ異なる経路をたどってきたディアスポラの人々が邂逅する場も生み出されるようになった。ここで注意が必要なのは、この邂逅がどのような文脈のなかで生み出され、両者の間にいかなる関係性をもたらしているのかという点である。国民国家への対抗というポストモダンのプロジェクトとしての出自をもつディアスポラ研究においてはその越境的な連携も訴えられてきたが（Clifford 1994=1998）、そうした見方に対してはそれが過度に理想主義的であるという批判も数多く寄せられてきた。そのなかで戴（2009: 54）は従来のディアスポラ研究が「抑圧された文化における権力の緊張関係こそを検証しなければならないのに、それを深く考察することなく、理想的な抵抗概念へと向かってしまった」ことを批判的に総括しつつ、現実の緊張関係に立ち返って検討することの重要性を提唱している。

(3) 研究課題

本研究で検討対象とするのは、同じ沖縄という出自をもちながらも、歴史的に大きく異なる経路をたどるなかで邂逅を果たした横浜市鶴見区の沖縄系日本人と沖縄系－南米系移民である。本論のなかで明らかにしていくように、沖縄系日本人においてはそのコミュニティ形成において「犠牲者ディアスポラ」としての性格が色濃く残っていたのに対し、南米系移民においては離散の過程でその「犠牲者」性は薄まり、鶴見へは資本主義の論理のもと「フレキシブルな労働者」として移住した。そして両者をめぐっては、こうしたそれぞれの立場のなかで結合と分離の間をさまよいながらの関係性の構築がなされている。ここで何が結合の契機となり、何が分離の契機となっているのか。そしてそこにいかなる権力関係が介在しているのか。これを探ることは、ディアスポラ内部の多様性のもとでの連携の可能性を探るうえで、重要な示唆をもたらさう。

そこで本研究ではディアスポラ概念の有する空間的・歴史的に広い視座から、課題の設定をおこなう。ディアスポラ概念のもとでは、まず歴史的に多世代にわたる分析が志向され、その世代を超えた分析は植民地主義や国民国家主義、資本主義などのマクロ水準の変動と結びつけながらなされる（戴 2009）。次に空間的には、「離散」というキーワードのもとにマルチラテラルな社会空間への想像力を喚起し（Cohen 1996）、同時に国境を越えた離散のみならず、国境内部での離散や帝国領土内の本土と植民地の間の移住をも射程に入れている（Cohen 2008=2012; 戴 2009 など）。本研究ではこのディアスポラ概念のもつ広い歴史的・空間的視座から、【課題 1】沖縄系の人々のコロニア・オキナワやビラ・カロン、そして鶴見への歴史的な移動過程を追いつつ、そのディアスポラとしての性格の変容を検討し、また【課題 2】「犠牲者ディアスポラ」沖縄系日本人と「労働ディアスポラ」南米系移民が鶴見で邂逅を果たすなかでいかなる関係を築いていったのかを論じる。

① 課題 1：沖縄からの離散の歴史的経緯とディアスポラとしての性格の変容についての検討

第一の課題は、戦前・戦後の沖縄からの離散から 1980 年代以降の鶴見への沖縄系－南米系移民の集住に至る歴史的経緯をたどりつつ、それぞれの離散集団のディアスポラとしての性格の変容とネットワーク形成のあり様を検討することである。ここでとくに着目したいのが Cohen (2008=2012) の論ずる「犠牲者ディアスポラ」と「労働ディアスポラ」という類型である。本研究では、前者を植民地主義などのもとでの迫害や戦争によって離散し、その犠牲者性・悲劇性が重要なモチーフとなっている集団として、後者を資本主義の論理のもと市場経済を支える「労働力」として移住がうながされた集団として措定する。

本研究では、戦前・戦後の沖縄からの離散の要因を日本政府の政策に着目しながら検討することによりこの離散がもともと「犠牲者」性の強いものであったことを明らかにする（第 1 章）。そしてそのディアスポラとしての性格がそれぞれの離散集団においていかに変容していったのかを、戦前・戦後の沖縄から鶴見への移住（第 2 章）や戦後の沖縄からコロニア・オキナワやビラ・カロンへの移住（第 3 章）、1980 年代以降のコロニア・オキナワやビラ・カロンから鶴見への移住（第 4 章）を検討するなかで明らかにしていく。また、なぜ鶴見の沖縄系－南米系移民において、人的なネットワークのもとで移動が進展しえたのか、その理由についても同時に探求する。

② 課題 2：鶴見での「犠牲者ディアスポラ」沖縄系日本人と「労働ディアスポラ」南米系移民の関係性の変容についての検討

第二の課題は、「犠牲者ディアスポラ」沖縄系日本人と「労働ディアスポラ」沖縄系－南米系移民の鶴見での関係性について検討し、南米系移民がその関係性の変容のなかでいかなるコミュニティを形成しているのかを明らかにすることである。第一の課題を検討していくなかで明らかにしていくように、鶴見の沖縄系日本人は日本－沖縄の非対称な権力関係に直面し続けるなかで「犠牲者ディアスポラ」としての性格を強く残してきた。一方、南米系移民においては離散の過程でその「犠牲者」性は薄まり、鶴見へは建設業を底辺から支える「フレキシブルな非熟練労働力」として移住してきた。それぞれの離散の歴史的過程のなかでディアスポラとしての性格を異にしてきた両者は、鶴見で邂逅を果たすなかでいかなる関係を取り結んだのか。

鶴見の南米系移民のネットワークについては、移民集団内部にとどまらない越境的なネットワークの存在も明らかにされてきたが（広田 2003）、それは他の移民集住地でも一般的に見られるものであるとの批判もまたなされてきた（樋口 2010）。それに対して本研究では、沖縄系の人々の歴史的文脈のなかで他の集住地とは異なる論理関係のもと両者の関係形成が進行したことを論ずる。具体的には就労の場面（第 5 章）と生活・教育の場面（第 6 章）での両者の関係性について検討し、植民地主義や資本主義の論理のもと両者が分離へと関係性が傾くなかで南米系移民コミュニティが抱えた困難（第 7 章）について考察する。

(4) 分析枠組み

まず沖縄からの離散の歴史的経緯と鶴見への移動過程については、マクロな水準の政治経済的変動やミクロ水準の家族や個人の状況だけでなく、メゾ水準の移民ネットワークに着目して検討をおこなう。本研究ではディアスポラ概念のもと、この移民ネットワークを単にバイラテラルなものとしてではなくマルチラテラルなものとしてみなしつつ、そのネットワークの生成と変容がいかなるマクロな水準での変動のなかで起きているのかを、「帝国の時代」(1900～40年代)と「冷戦の時代」(1950～70年代)、「グローバル化の時代」(1980年代～)という時代区分のもと検討する。

次に鶴見での沖縄系日本人と南米系移民の関係性に関して、本研究では移民集団内でのネットワークに加え、階層や人種、民族を超えたつながりを論じるエスニック・ネットワーク論(奥田 1999; 広田 2003)を参照し、南米系移民集団内部のネットワークと、沖縄系日本人と南米系移民の関係性、双方を検討していくこととする。

(5) 調査方法

本研究における調査は2つの基本方針のもとでおこなった。それは第一に戦前の沖縄からの離散から現在の鶴見への集住に至るまで、ディアスポラの歴史的過程に沿った調査を志向したことであり、第二に沖縄系の人々のディアスポラのなかの複数地点での調査を志向したことである。従来の日本の南米系移民研究においては労働や教育、都市の場における現実的な問題の存在を背景に、とりわけ日本での生活のあり方に関心が集中する傾向があったが、沖縄系・南米系移民の移動をディアスポラという歴史的・空間的な文脈のなかでとらえた場合、それを現在の日本での居住に焦点をあてて解釈することには大きな限界があると言わざるをえない。そこで本研究では複数地点をめぐる調査をおこない沖縄系の人々の移動の過程を歴史的にたどることによって、その限界を乗り越えることとした。具体的には鶴見に暮らす南米系移民(2世を含む)や鶴見から南米へ帰還した人々へのインタビュー調査、学校教師らによる教育支援組織や南米系移民自身の相互扶助組織への参与観察、南米や日本本土の沖縄県人会史などの文献調査などを実施した。

3. 各章要約

第1章から第3章では、鶴見への南米系移民の集住が人的なネットワークによって進展することができた前提条件となる「帝国の時代」(1900～40年代)から「冷戦の時代」(1950～70年代)にかけての沖縄からの離散の継続について検討した。第1章では「帝国・冷戦の時代」における沖縄からの離散の要因について、とくに日本政府との関係から検討した。沖縄からの離散をめぐる先行研究において、それは貧困によってうながされた「労働ディアスポラ」として解釈されることが多かった。それに対して本研究では、両時代とも、日本の沖縄に対する植民地主義的政策のもとで継続的な離散がうながされており、それは「犠牲者ディアスポラ」としての性格が強いものであることを明らかにした。「帝国の時代」には軍

事拡大が進むなかで沖縄での経済的搾取体制が確立し、政策的に貧困が作り出され、本土や南米への離散が進行していった。「冷戦の時代」には沖縄戦による土地の荒廃に加え本土からの米軍基地の移転が進むなかで南米への移住が政策的に促進され（1950～60年代）、さらにその後米軍に対する島ぐるみ闘争の流れを受けた本土復帰運動のなかで本土への移住がうながされていた（1970年代）。

第2章では「帝国・冷戦の時代」における沖縄から鶴見への移民について、とくにメゾ水準のネットワークやコミュニティのあり様に着目しながら検討をおこなった。沖縄から鶴見への移住は、日本の帝国主義的・資本主義発展を支えるフレキシブルな低賃金労働力として沖縄系の人々が本土の底辺労働市場のなかに編入されていくなかで進行し続けていたこと、そして鶴見ではウチナーンチュとしての「二重意識」（Du Bois 1903=1992）が形成されていき、「沖縄らしい」とされた言語や習慣は克服すべきものとして認識されるようになっていったことを明らかにした。さらに、一般の本土企業への就労も難しいなかで自営業化を果たした沖縄系の人々がおり、かれらが沖縄からの移住者の受け皿となり続けていたことを示した。

第3章では、鶴見の多くの南米系移民の出身コミュニティであるコロニア・オキナワ（ボリビア）とビラ・カロン（ブラジル）を取り上げ、「冷戦の時代」にそれぞれのコミュニティにおいていかに沖縄系移民の集住が進行したのかを明らかにした。戦後の南米への移住は冷戦体制のもとで「政治の道具」として実行されていたことを確認しつつ、コロニア・オキナワとビラ・カロンがそれぞれ農業／自営業コミュニティとして発展するなかで前者から後者への転住が進行し、両コミュニティを取り結ぶネットワークが強化されていったことや、両コミュニティで社会的・経済的地位の達成がはかられていくなかで「ウチナーンチュ」としての文化やアイデンティティは必ずしもマイナスの価値づけをなされずに後続世代へと継承されていたことを示した。

次いで第4章では、「グローバル化の時代」（1980年代～）におけるコロニア・オキナワやビラ・カロンからの鶴見への移住について検討した。金融市場の不安定化のなかで鶴見と南米（ビラ・カロンとコロニア・オキナワ）双方の移民がそれぞれの経済的な難局を乗り切ろうとするなかで、「帝国の時代」と「冷戦の時代」にかけて形成・維持され続けてきたディアスポラ・ネットワークが作動し南米から鶴見への移住が進行していたことをまず確認した。さらにここでかれらは重層的な下請構造の末端に「フレキシブルな非熟練労働力」として日本社会のなかに編入されていたことを確認し、鶴見の南米系移民が、資本主義の論理のもと市場経済を支える労働力として移動する「労働ディアスポラ」としての性格を強くもったものであることを示した。

第5章から第7章では、異なる経路を背景にもちつつも経済的利害関係の一致のもとで「協働関係」を形成した沖縄系日本人と南米系移民がその後どのように関係性を変容させていったのかを検討した。まず第5章では、電設業という労働市場のなかでの沖縄系日本人と南米系移民のつながりについて検討した。元請ー下請の非対称な権力関係が強く働く

重層的な下請構造における沖縄系電設業者の不安定な経営が、南米系移民にとっての起業の機会構造を作り出したことで、沖縄系日本人と南米系移民の経済的な場面でのつながりが切れていったことを論じた。さらに、その後南米系移民は移民同士の強い紐帯のもと独自のアソシエーションを結成することによって下請としての経営状況の安定化をはかっていったこと、さらに電設業という職業が第二世代男性に継承されていく兆候も見られることを明らかにした。

第6章では生活・教育支援の場面に目を移し、「沖縄」を軸とした日本人とのネットワークの形成と断絶について検討した。鶴見の沖縄系日本人の「犠牲者ディアスポラ」としての歴史性のもとで日本人のなかに南米系移民に「共振」する人々が現れ、「共同関係」の構築が一定程度進行し、それが日本人による生活・教育支援にもつながっていったこと、そしてそのもとでマイノリティとしてさまざまな困難に直面せざるを得ない日常生活を送る子どもたちをエンパワメントする取り組みが立ち上がっていたことを確認した。しかしまた同時に、その「犠牲者ディアスポラ」としての沖縄系日本人の歴史性が「共同関係」の構築を阻害するものともなったことを確認し、この場面での両者のネットワークは限定的なものとなったことを示した。

このように南米系移民男性たちはその「強い紐帯」を活かしエスニックな労働市場を確立させていく一方、「沖縄」を軸とした日本人との「弱い紐帯」は限定的なものにとどまった。そのようななかで鶴見のブラジル系コミュニティにおいて生じたのが、ジェンダーをめぐる問題であった。第7章では鶴見における「男性稼ぎ主型」のジェンダー分業に焦点を当て、再生産労働の主な担い手となっている女性たちが抱えている困難や、一見「成功」を収めているかのように見える男性たちのブラジルへの帰還について検討した。再生産労働の主な担い手となった女性たちは、日本社会に関する制度的知識が不足するなかでとくに子育て・教育に関して困難を抱えることとなっており、そのなかでコミュニティの内部からそれを克服する取り組みが立ち上がっていた。また一見「成功」を収めているように見える男性のブラジルへの帰還という現象の背景には、鶴見のコミュニティにおける職業の限定性やコミュニティ人口の不均等なジェンダー比の問題があることを指摘した。

以上の議論を踏まえ終章では、本研究の知見をまとめ、今後の課題について論じた。いかなる文脈のなかで沖縄系の人々の越境的なつながりの形成はうながされ、そしてそれはいかに変容していったのか。この問いに対する一つの重要なポイントとなっていたのは、植民地主義の論理であった。マクロな水準での沖縄への経済的搾取体制は沖縄系の人々の継続的な移住をうながし、ミクロな水準での社会的差別はそれぞれの離散地でのコミュニティとアイデンティティの形成のあり様に強く影響を及ぼした。そしてこれらの点が沖縄系の人々の越境的なネットワークの形成と断絶を、大きく左右することとなったのである。また、もう一つ、資本主義の論理もネットワークのあり方に強く影響していた。南米系移民の鶴見へのネットワークを用いた移住は資本主義の論理のもとでこそうながされ、沖縄系日本人との邂逅がもたらされることとなった。だがしかしそれは民族的マイノリティたるかれら

を労働市場のなかで不安定な立場におき、就労の場面での両者の分離をうながすこととなっていた。資本主義の論理のもとマイノリティが「フレキシブルな労働力」としての役割をあてがわれたことが、沖縄系日本人と南米系移民のつながりの形成と断絶に強く影響していたのである。

以上本研究では、植民地主義や資本主義のもとでのマイノリティ性が鶴見における沖縄系日本人と南米系移民の関係性に強く作用していることを明らかにしてきた。しかし 2010 年代後半以降「ホームランド」沖縄側からの働きかけや横浜市役所と鶴見区役所の観光行政の影響を受け、異なる論理のもとでの分離から結合への民族関係の変容の萌芽も見られる。そこで最後に、「ホームランド」沖縄側からのディアスポラへの働きかけや鶴見での新たな関係性の生成を検討することを今後の課題として設定し、本稿を締めくくった。

【参考文献】

- Cohen, Robin, 2008, *Global Diasporas* [Second Edition], London: UCL Press (=2012, 駒井洋訳『グローバル・ディアスポラ』明石書店)。
- Clifford, James, 1994, "Diasporas," *Cultural Anthropology* 9(3), 302-338 (=1998, 有元健訳「ディアスポラ」『現代思想』26-7: 120-156)。
- Du Bois, Edward Burghardt William, 1903, *The Souls of Black Folk*, Chicago: A. C. McClurg & Co (=1992, 木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳『黒人のたましい』岩波書店)。
- van Hear, Nicholas, 1998, *New Diasporas: The Mass Exodus, Dispersal and Regrouping of Migrant Communities*, London: Routledge.
- Vertovec, Steven, 2009=2014, *Transnationalism*, London: Routledge (=水上徹男・細萱伸子・本田量久訳『トランスナショナリズム』日本評論社)
- 梶田孝道, 2002, 「日本の外国人労働者政策——政策意図と現実の乖離という視点から」梶田孝道・宮島喬『講座国際社会 第1巻 国際化する日本社会』東京大学出版会, 15-43.
- 戴エイカ, 2009, 「ディアスポラ——拡散する用法と研究概念としての可能性」野口道彦・戴エイカ・島和博『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店, 15-90.
- 鄭暎恵, 2017, 「ディアスポラ」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 752-753.
- 樋口直人, 2010, 「都市エスニシティ研究の再構築に向けて——都市社会学者は何を見ないできたのか」『年報社会学論集』23: 153-164.
- 広田康生, 2003, 『エスニシティと都市 [新版]』有信堂高文社.